

地面につきそうなお腹をみながら、我家以外のどこかでお産することを祈るばかりであったが、4月はじめの生あたたかい春の夜、玄関脇の縁の下あたりでビイビイという仔猫のなき声をする。やんぬるかな　　と思ったが後の祭である。ところが間もなくその声はハタと止んでしまった。どこか居心地の好いところを見つけたのかと思っていた矢先、何と玄関の天井裏で複数の仔猫のなき声をする。しかも日がたつ中になき声は次第に大きく、ホコリや枯葉が落ちて来るようになった。オババちゃんは無表情な顔で御飯時になるとあらわれ、つつましくかき食べ終ると姿を消してしまう。ある時ソツとつけて行ってオババちゃんが裏の白取家との境の塀を足場にして、我家の屋根にとびうつり、屋根と壁のすき間から屋根裏に入るところを見届けてしまった。半月たち1月たつてもオババちゃんは仔猫をおろす気配がない。私は仔猫の体重がオババちゃんのアゴの力を上廻ったらどうしようかと気が気でない。その中仔猫はますます大きくなって天井裏をさかんに移動するようになり、私をヤキモキさせた。そうして5月末の日曜日の朝、私はとうとう裏庭の八つ手の下にまるくよりそっている仔猫を発見したのである。ヤッタヤッタと私はオババちゃんの愛嬌のある顔を眺め拍手を送った。私が大声を挙げ、娘共がドツとかけつけ仔猫は黒白ブチが1、黒が2と判明した。しかし人間共のさわざがあまり大きかったせいかオババちゃんは仔猫を鈴木家の木材をおよっているキャンパスの下にくわえこんでしまったが、半月もすると3匹従えて我家にあらわれるようになった。娘共は早速アニメ漫画からとって大介、甲児、ヒカルと命名し、さかんに餌でおびきよせて、とうとう家の中に連れこむことに成功した。こうしてこの仔猫達は我家の準家族として家中を駆け廻るようになったのであるが、7月に甲児が胃腸をこわし、病院に連れて行ったが手おくれで死に、牡とばかり思っていた大介は何と牝であることが判明して止むを得ず太子という変な名前になり、ヒカルはピカというニックネームで呼ばれるようになった。オババちゃんは育児期間中は実によく面倒を見、時々どこからか大きなエビフライや鮭の頭などをもって来て食べさせていたが、今は飼猫に出世(?)した我子達をみても別に羨むでもなく、相変らずオズオズとやって来ては、太子やピカの食べ残しをしとやかに食べて出ていってしまう。

## わたしの歴史地理

柴田孝夫

秩父の二山ばかり奥に両神村薄というところがある。荒川の支流の赤平川の又支流の薄川の流域にあたる。こゝは中世の武士団の武蔵七党のうち丹党に属する薄氏の本拠である。ひどく奥まったところであるから山間の僻地であろうと思っていたが薄川の段丘上には桑里水田などもあって意外にひろけたところである。こゝに無住で荒れてはいるものの立派な薬師堂があって埼玉県保護建造物になっている。室町時代の建築だという。こゝが薄氏の館趾だと思われる。住職がいなくてこれを預っている人を土地で尋ねた。両神山の中腹に金剛院という寺があってそこの法印だという。せまい山道を車で上れるかどうか危みながら砂利の急坂を登りつめた。なるほど二三軒の集落がある。もう日は暮れかよっているのに人影がない。「金剛院さん」と大きな声で二声三声呼んだ。山の上の方から声

があつて「わしじゃ」おそろしく背の高い老人が長い杖をついて下りてくる。金剛院は実の名を両神山御嶽神社金剛院という。山伏の寺でこの老人はこゝの法印であつた。「今ごろ何しに来なすつた。」「薄氏のあとを訪ねて参上いたしました。」こゝで話がほぐれて、「わしのことを土地ではウスダイラと呼ぶ、ほんとうはス、キダイラだと思ふ。山の桑畑をおこしていたら人骨と一しよに室町時代の永楽銭が沢山出てきた。もうその頃からこゝに住まっていたと思うが、下の村の冠婚葬祭はわしが行かねば始まらぬという。薄平はおそらく薬師堂のあたりであろう。」法印は今も正しく下の村の支配者であるらしい。わたしはこの異様な老人に丹党の薄氏のおもかけを見出した。阿蘇では古代の阿蘇の国の国造をまつる国造神社とこれに付随する古墳を訪ねた。社務所に立寄ると神官は阿蘇神社の方へ行って今はいないからとその母親だという老婆が懐中電燈を手に古墳の中を丁寧に案内してくれた。老婆の気圧されるような気品にこゝでも古代の豪族の姿をみた。出羽の羽黒山では坊の所有する経田という水田に中世の頃の荘園の形態がそのままのこっているのを知つた。今にこの姿をみるとそこに古代や中世がたぐり寄せられて歴史が現実となって眼前にせまってくる。何の因果かわたしは過去の時代に興味があつて歴史地理などというものをやっているのだが古墳や館址そのものにはあまり感動がない。それは殺して虫針でさした昆虫標本のようにひからびた姿だけである。古墳や館址などの遺物は何かを調査するための手段であつて対象ではない。生きた動物の生態には教えられることが多いと動物学者はいうが、歴史地理も過去の環境の復原だけでは昆虫標本のようにつやがない。地理の対象のすべての事象はやはり生きてゐる。生きてゐることは時を追つて形を変え、場所をうつし、動きまわることである。地理は横のひろがりだけを強調するけれどもすべての事象は生きてゐるから過去もあり未来もある。わたしの地理はそうありたいと願つてゐる。

## 偶 感

矢 澤 大 二

随分以前のことである。私が初めてボン大学の、いまは亡きトロール先生を教室を訪ねたときのことであつた。この付近で特に見て廻りたい所は、との先生のお言葉に甘えて私は、一つはライン河谷の段丘地形、いま一つはラインラントの土地利用の変遷、の二つを申し上げた。先生は早速アイマズさん（当時は助手。現在同大学経済地理学教授）を呼ばれ、明朝、大学の車を使って、ラインの段丘を見てあるくようにと云われた。そこでわれわれ二人は、その翌日、ほとんど一日がかりで、ライン川沿いを巡検した。途々、同氏から、この地域の地形発達のことを、現地について、実に明快に説明していただいた。

その数日後、これまたトロール先生のお計らいで、フレンツェルさん（当時は助手。現在は地形学、古地理学における第一人者）を煩わして、これまた大学の車で、ラインラントの現在の土地利用はもとより、現在に至るまでのその変遷の大筋を理解すべく、再び一日がかりで見て廻つた。途々同氏から実に適切な説明のあつたことは勿論である。

ライン河谷の段丘、ラインラントの土地利用の変遷などについては、文献を通して、私も多少の知